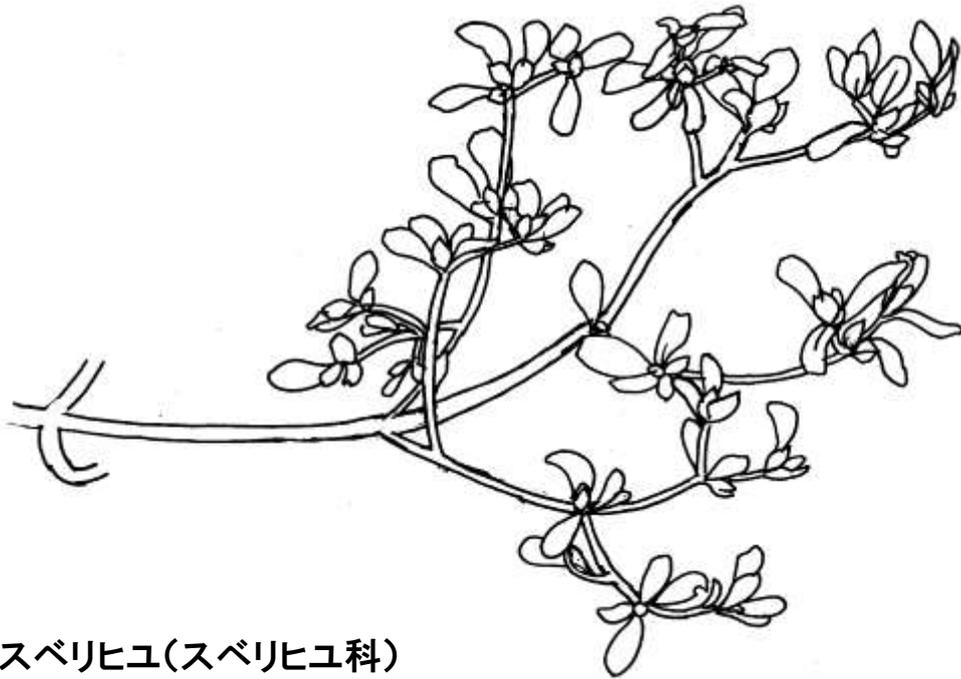


花ちゃん、オー君、モンタ博士、フタ博士のかくかくドドドド立ててく5

国立市立国立第七小学校

平成29年6月28日 NO.30 (430)



スベリヒユ(スベリヒユ科)

オー君 「なんだ？この植物？」

花ちゃん 「オー君、知らないの。これはね、『スベリヒユ』という植物よ。」

オー君 「スベリヒユ？聞いたことないなあ。それで、この草がどうかしたの。」

花ちゃん 「どうかじゃないわよ。今、この草知らないなんて、おっくれてるー。」

オー君 「え！それって、どういうことなんだよー。」

花ちゃん 「この草は、食べられるのよ。学校近くの畑のあちこちで雑草としてきらわれているけど、本当は、そうじゃないらしいの。」

オー君 「だから、どういうことなんだよー。」

花ちゃん 「テレビのバラエティー番組の『秘密のけんみんショウ』でも紹介されたのよ。」

オー君 「『秘密のけんみんショウ？』どんな番組なのかな。ぼく知らないよー。」

モンタ博士 「あれ？オー君。見てないの。モンタ博士はよく見るよ。楽しい番組だよ。」

花ちゃん 「北海道から沖縄まで、全国の都道府県のご自慢を紹介するのよ。」



モンタ博士「そうだよ。山形県^{やまがたけん}では、このスベリヒユをよく食^たべるそうなんだよね。」

花ちゃん「スーパーでも、『ひょう』とよばれて売^うられているそうよ。」

モンタ博士「モンタ^{はかせ}博士も食^たべてみたけど、けっこううまかったね。ぬめりがあってね、おいしいんだね。からし^{しょうゆ}醤油で食^たべてももいいね。沖縄^{おきなわ}ではニンフトウカーと呼^よばれ、よく食^たべられるそうだ。」

花ちゃん「おひたしでおかか^かとしょうゆをかけても、とってもおいしいんですよね。」

オー君「それで、いまでも、探^{さが}すとあるんですか。」

花ちゃん「どこにでもあるわよ。畑^{はたけ}や道^{みち}ばたにもあるわ。」

モンタ博士「そうだね。このスベリヒユは、もともとはマツバボタンの仲^{なかま}間^まなんだよ。」

花ちゃん「マツバボタンっていうのはね、ペンの先などでオシベにさわると、オシベがさわった方向^{ほうこう}に曲^まがる園芸植^{えんげいしょくぶつ}物^{ぶつ}よ。花壇^{かだん}などにもよくあるわ。」

オー君「マツバボタンっていうのは、あの葉^はっぱのあつ^{あつ}いよ^ような太^{ふと}いよ^ようなやつか。」

モンタ博士「マツバボタンは食^たべられるかどうかわからないから、食^たべないでね。それでは、みんな^{みんな}で今^{いま}からスベリヒユを取^とりに行^いって、おひたしを作^{つく}ろう。」

CAM システムの植物

スベリヒユは、乾燥地帯に多いサボテン等と同じように厚い葉を持ち、CAM と呼ばれる特別な光合成システムをもっています。光合成は光により水と二酸化炭素から糖を作り、そのために水を吸い上げ葉にある気孔という穴から二酸化炭素を取り入れます。普通、昼間に光合成をするので、昼に気孔を開けて、夜閉じるのですが、乾燥地帯では昼間に気孔が開くと、そこから水が蒸発してしまいます。そこで登場するのが CAM システム。このシステムでは気孔の開閉が普通の植物と逆であり、水分の蒸発が少ないという利点があり、砂漠などの乾燥地帯の植物の生きる知恵でもあり、このスベリヒユもまた然り也。